「博物館」と「博物館学」

研究会想より

Research association of "Museology"

第10号影響

■Contents**■**

第 1C) 믕	発行る	を迎	え	$\overline{}$	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	Ι
研究乳	笔表:	会の記	記録	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	\blacksquare
見学紀	会の記	記録		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	\blacksquare
書	¥ ([丹波	(マ)	ソナ	ブン	/ Ec		愈	₫σ.) -	73	3O	О	Θ,])	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	\mathbb{V}
展示排	比評	(練見	馬区	<u> </u>	石	中;	井:	公	袁	Z1	る	さ	: ك	文	化	館	Ä	isi	姐	表力	₹)	•	•	•	•	•	•	•	•	\mathbb{I}
「博物	館」	レ「博	物食	它学	Ź ∣₹	H:	弈:	会	\mathcal{O}	あ	KD	4							•	•					•					ΧI

第10号発行を迎えて

2004年に発足した当研究会も7年目に入り、本紙も第10号になりました。研究や仕事で博物館にたずさわるか否かに関わらず、博物館に興味・関心をもつ人たちが、自由に博物館を考える集まりとして共に学び、議論し、情報交換を行っています。

研究会発足以来の数年を振り返ってみても、博物館内外をめぐる動向や、博物館論・博物館学の流れは少しずつ、しかし多様な変化をみせているように感じます。それは、博物館という存在が社会あるいは研究・教育の世界から様々な要請や期待、時に批判を受け、それに博物館自身が応え、発言していこうとする動きの表れでもありますし、同時代に生きる我々がそれを見続け、考える意義も大いにあるでしょう。しかしながら、当研究会が置かれる神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科において、研究会発足の契機となった「博物館資料学」専攻は既に姿を消しており、博物館を論じ、考えるための環境は充分とは言えません。またそれは本学に限った問題ではないでしょう。

その中で近年では、同様な問題意識を共有する学外の方々との交流も生まれ、当研究会の活動の輪は徐々に広がりつつあります。異なる立場の人たちが、多様な視点から博物館という場を考える環境を、これからも模索していきたいと考えています。今後とも当研究会をよろしくお願い申し上げます。

さて、本紙はこれまで当研究会の活動紹介を主眼に発行してきましたが、本号は記念号として書評、展示批評および研究会のあゆみを掲載しました。これもひとつの試みですが、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。

「博物館」と「博物館学」研究会 内山大介

研究発表会の記録

第 33 回発表会 日 時: 2010 年 5 月 5 日 発表者: 竹田秀一 テーマ: 見学会をとおして一博物館展示について思うことー

今回の発表会では 1 月 31 日に実施した「江戸東京たてもの園」への見学会を踏まえての発表を行った。江戸東京たてもの園は移築保存した建築物と生活再現を展示の中心としている博物館であり、野外博物館の 1 つでもある。今回の発表では、特に生活再現展示が持つと考えられる問題点を中心として参加者で議論することが出来た。

生活再現展示の持つ問題点とは、あたかもそこに再現された展示が、再現している時代の全てであり、絶対的なものであるという印象を与えてしまいかねない部分にあるように考える。生活再現展示とはあくまで展示を作成する側のスタンダードであり、その時代の全てが描き出されているものではないことを理解する必要があると考える。そのような点から私の意見としては来館者にどのような形であれ、そこに展示されているものは絶対的なものではないことを伝える必要があるように考えている。以上が今回の発表の概要である。

発表会の参加者には博物館で働いている方もおり、展示を作る側からの貴重な意見を聞くことが出来た。博物館への関わり方によって、対象の見え方は異なることが改めて理解できた発表会となった。今回の発表会の内容を踏まえた上でより多角的にこのテーマに関して考え、もう一度このような機会に発表したいと考えている。

【歷史民俗資料学研究科 修了生】

第 34 回発表会 日 時: 2010 年 7 月 30 日 発表者: 佐原 慧 テーマ: 旧石器ハテナ館の整備·運営についてー学習館としての役割

今回、私が勤務している「史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館(旧石器ハテナ館)」の整備・運営について発表を行った。当館は2009年4月1日、国指定史跡である「田名向原遺跡」のガイダンス施設として開館した。全国的にも珍しい「旧石器時代」を中心とした施設であり、約2万年前の後期旧石器時代の住居跡とされている「住居状遺構」を中心に、周辺地域で発見された縄文以降の遺物も合わせて展示している。また館に隣接している「遺跡公園」内には、「住居状遺構」や竪穴式住居、古墳等が保存・復元されている。

当館は「学習館」といった名称からも読み取れるように、体験学習に特化した施設である。これは「来館者が自発的に課題を発見して学習する」といった基本理念がもとになっている。体験学習の内容としては、石器・土器・矢じり・勾玉作りの四つの定例体験を主軸に、弓矢作り・古代生活体験・どんぐりクラフト・お泊り体験・ナイトミュージアムなどの各種イベントも盛んに行っている。

また今年度より市内小中学校への「出張授業」に力を入れ始めている。教育現場における博物館利用の必要性は、ほとんどの先生方が「必要である」と考えているが、授業数の増加により、博物館に足を運ぶ時間がとれないというのも事実である。

このような教育現場の現状を踏まえて、当館では出張授業に力を入れることとなった。出張授業に関しては、 ただ授業を行うのではなく、学校側との綿密な打ち合わせをおこない、独自の指導案・教材を作成するなど、 より内容の濃い授業作りに力を入れた。

当館は体験色の強い施設である。しかし開館当初は館としての方向性が定まっておらず、ほぼ手探り状態での運営であった。試行錯誤を繰り返し、さまざまなイベントを行っていく中で来館者や学校側が「学習館だからこそできる体験」を求めていることが少しずつ分かってきた。当然のことではあるが、その館の特性をいかに引き出す事が最も重要であり、当館においてそれが「他館にはない周辺環境を生かした体験学習」であった。

今回の発表会では、博物館という施設はどのような機能を求められて、それにどのように答えていくか改め て議論することができ、大変有意義な発表会であった。

> 【歷史民俗資料学研究科 修了生· 史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館 学習指導員】

見学会の記録

第 17 回見学会 日時: 2010 年 6 月 6 日

見学館:国立ハンセン病資料館

6月6日、我々は「国立ハンセン病資料館」を見学した。同館は東京都東村山市にある「ハンセン病に対する正しい知識の普及啓発による偏見・差別の解消及び患者・元患者の名誉回復を図る」(国立ハンセン病資料館パンフレット) 為に設立された資料館である。

思い返してみれば、我々研究会の母体ともいえる中村ゼミにおいて、中村先生はこのような決して明るくはないテーマを扱った博物館の重要性を説いていらっしゃった。そのためゼミの見学会でも同館をはじめ差別や戦争



といったテーマを扱った博物館を訪れたことがある。我々にとっては博物館を考える上で一つの指針ともいえる博物館と思われる。

2001 (平成 13) 年に、小泉政権下で行われていたハンセン病訴訟においてこの病気を知った方も多いかもしれないが、この病気の歴史は古く、日本書紀に既に記述がある。資料館の展示はまず古代から近世にいたるまでハンセン病の扱われ方を紹介している「歴史展示」、癩病患者を隔離していた「癩療養所」に関する展示、そして患者や元患者たちによる、生活改善や文化活動、社会的自立への取り組みを扱った「生き抜いた証」という3つの常設展示室と、企画展示室で構成されている。当日は「着物にみる療養所のくらし」という企画展が行われていた。

さて今回は常設展示室「生き抜いた証」で展示されている患者・元患者の趣味や娯楽に関する展示を取り上げる。この資料館において僅かであるが気持ちが穏やかになる空間である。文芸、音楽、陶芸、絵画、写真等々、患者・元患者たちが様々な苦難に遭いながらも生活を掴み取り、生き抜いた証のように感じた。かつて大阪人権博物館を見学した際には、気持ちが穏やかになるような展示空間はほとんど無かったと記憶している。このような手法では差別の実態を伝えることの重要さを理解していても、伝えられる側の気持ちが萎縮してしまうことは考えられないだろうか。そういった意味でもハンセン病資料館における手法は伝え方として、よい方法なのではないかと感じた。

それから個人的な話になるが、患者が療養所に入所する際に所持していた現金が展示されていたのだが、そこには筆者が幼き頃使用していた伊藤博文の千円札が含まれていた。こういうものを目にすると、これらの問題はつい最近まで行われていた出来事であるのだということを、改めて考えさせられる。

【歴史民俗資料学研究科 修了生:金田晋也】

李 龍植『丹波マンガン記念館の 7300 日』(2009 年 5 月/解放出版社) 栗山 究

昨年5月、丹波マンガン記念館が閉館した。京都は丹波・京北地区にあるマンガン鉱山のなかに、在日朝鮮人である李貞鎬・龍植親子が創設した博物館である。朝鮮人強制連行や被差別部落の人たちの労働実態やそのフィールドを現在に伝える現地保存型の博物館として知られる。開館20年目の出来事であった。

本書はこの閉館の日に合わせて、同館2代目館 長である李龍植により出版された。丹波マンガン 記念館の歴史は、その著者である龍植のアボジで ある貞鎬の歩んだ歴史そのものである。それは同 時に、近代日本が歩んできた歴史の在り方そのも のに規定されていることが、本書を通じて理解で きることだろう。そこからは、日本による朝鮮の 植民地支配から朝鮮戦争を経て半島の南北分断へ と至る歴史の過程で、日本社会のなかで在日朝鮮 人の置かれてきた生活の境遇やその実態が浮かび 上がってくる。また、日本の植民地支配に起因し、 戦後も継続して連鎖する被害と加害の問題を、現 在の日本社会の在り方そのものへ反省的に照らし 出していく内容が綴られている。平易な文章で、 問題の所在とその論点がうまくまとまっているた め、とりわけ歴史学を専門的に専攻していない初 学者にとっても、読者自身の身近な問題として接 することができ、たいへん読みやすい一冊に仕上 がっている。

本書は、二部構成・十章仕立てによって構成されている。第一部「丹波マンガン記念館の 7300

日」は、龍植のこれまでの半生において実際に経験し、アボジや周りの人たちから伝え聞き、そしてみずから調査してきたことがらが、日本語による分かりやすい「語り」となって伝えられている。

第一章 父母の歩んだ道

第二章 「在日」に刻まれた歴史

第三章 アボジ李貞鎬が求めたもの

第四章 父との旅ー朝鮮人強制連行とマンガン 鉱山

第五章 じん肺との闘い

第六章 丹波マンガン記念館の誕生

第七章 丹波マンガン記念館館長を受け継いで

第一章から第三章では、丹波マンガン記念館初代館長であるアボジの生い立ちを軸に展開されている。アボジは幼少であった 1930 年代、日本に渡ってきた在日朝鮮人で、戦後も丹波において、戦時中に朝鮮人強制連行によって日本に渡らざるを得なかった同胞たちの世話などにも専心してきた自分たちの民族を大切にする人であった。1970年代に入ると経済システムの変容により、日本の鉱山は各地で閉山を迎え、その労働者は急激に減少していくが、マンガン鉱山労働者でもあったアボジはその長年の劣悪な労働環境において、やがて「じん肺」を引き起こし、1995年に 60 代の若さで他界する。龍植の見てきたアボジの生い立ちからは、アボジの日本での厳しい生活環境とともに、その周りには日本にくらす、そして差別に直

面した多くの朝鮮人の存在があったことが理解できることだろう。丹波マンガン鉱山の戦前一戦後史においては、日本では人間らしい生活ができず、朝鮮にも帰れないなど、歴史のなかで戦前から戦後に至るも居場所のなかった人びとの存在が浮かび上がってくる。「同胞を軽蔑していたことの愚かさ」であったり、「故郷から遠く離れて、無念にも病に襲われている、あるいは身寄りがない、故郷と連絡がとれないなど、さまざまなくやしい思い」を運動のなかから見てきたアボジは、この歴史を無かったことにしてはいけない、という思いから、マンガン鉱山跡地を現地保存する博物館を創ることを決めていくまでのエピソードが明らかにされている。1980年代のことであった。

第四章・第五章では、朝鮮人の労働を「強制労働」として捉える視点を、植民地日本の歴史的背景から汲み上げるとともに、そこでの労働環境が「じん肺」を引き起こすなど、労働者一人ひとりの生命にかかわる問題とつながっていることが取り上げられている。こうした問題は、報道されること・されないことというメディアの問題や、被差別部落の問題とが密接に関連しあうことも指摘されており、私たちの生きる近代社会の矛盾が、具体的「証言」を通して綴られている。それはすなわち、丹波マンガン記念館が伝えようとしていた内容でもあるだろう。

第六章・第七章では、実際に博物館をつくっていくこと、そしてそれを維持運営していくことの困難性が、時代の趨勢や支配的状況によって翻弄され続ける様相を通して、描かれている。人びとの「ワンダーランド」といったまなざし、行政の不対応、財政有志の拒絶、有志の人びとや「人権ネット」の支援によって生じる存続運動、借金の累積と決して黒字にはならない経営、そしてNPO

法人化から閉館を決意するに至るまで、丹波マンガン記念館が直面した 1980 年代から 2000 年代にかけての各種課題が、ここからは汲みとることができる。そして「人権とは周囲の抵抗が少々あっても切り開く強さ」である旨を語る龍植の言葉の背景にある「ともに生きる地域社会の一員としてみてくれない」、そればかりか「治安取り締まりの対象」として見られてしまうという思いは、ひとり「博物館」が抱えてきた経験的問題の凝縮のみに留まらず、現代社会の問題をも照らし出している。

第二部「私の研究ノート」は、以下三章から構成されている。

第一章 在日朝鮮人差別からの解放を願って

第二章 加害の歴史を直視して

第三章 歴史の歪曲を糺すー田中宇『マンガンぱらだいす』第三章批判

第一部の「語り」を通して、龍植が読者に伝え たいことのエッセンスは、この第二部の「研究ノート」に更に凝縮されて展開されている。以下では、評者がそれを、二つのメッセージとして再構成した視点から紹介してみたい。

まず一つは、在日朝鮮人の生活から私たちのとりまく「差別」の問題に眼を向けようというメッセージである。戸籍、就職、公務労働、入試、地方参政、外国人登録、住居、国民・障害年金、生活保護における差別、そして植民地被害と拉致問題という復讐の連鎖といった各種事例が、そこでは取り上げられている。

二つは、ジャーナリズムであれ、閣僚発言であれ、博物館展示であれ、加害の立場に立つ自らの

反省的契機がなく、自らの「負」の側面に触れることのない歴史記述は、歴史の歪曲を創り出すばかりか、今日に至っても新たな被害者を生み続けているのだというメッセージである。とりわけ博物館ー博物館を学び実践するもの一にとって重要な点は、被害者への謝罪のうえに立った自らの加害の歴史に向き合った展示を表象する博物館が稀少であるという、現代日本の博物館が戦後に至るも抱え込み、歴史的にも刻み続けている構造的問題の指摘だろう。日本の博物館制度からむしろ疎外された領域で、支援者たちの手弁当によって創られた民立民営の博物館群が、辛うじてこの問題の一端を世界に指摘してきている現状がそこにはあることが、第二部全体では示唆されている。

評者が、丹波マンガン記念館が閉館される予定 である報道を耳にしたのは、一昨年の京都での第 6回国際平和博物館会議前後のことであったと記 憶している。この頃、地元メディアの一部では既 に丹波マンガン記念館閉館の旨が報道されていた。 昨年3月、京都では「丹波マンガン記念館を再建 する会」発足へ向けた動きが見られた。博物館を とりまく多くの諸課題はなお継続し続けるものの、 日本による朝鮮の植民地支配から一世紀を前後し て現在、地元ではようやく、日本人も在日朝鮮人 とともにお互いに手をたずさえ、歴史の検証と「再 建」への道が模索されはじめようとしている。評 者のくらす関東地域では、博物館問題研究会や博 物館学院生共同研究会(そのつながりで本研究会 の内山さんからのメールでの紹介があり、このメ ールを経て、評者が本書を紹介しているという経 緯があります)などの研究会や、在日韓人歴史資 料館などが主催するセミナーでは、この報道やそ の歴史的意味を伝えていたが、「再建する会」の

集まりに参加していた川崎在住の市民によれば、 丹波マンガン記念館閉館をめぐる報道は、関東地域の人びとにはなかなか伝わっていかない環境が あるともいう。

博物館研究の領域においてはどのような展開を見せているだろうか。かつて、君塚仁彦(2004)は、丹波マンガン記念館を「東北アジア『歴史を逆なでする』博物館」の一つとして紹介していたことがあった(『季刊前夜』第Ⅰ期第1号)。福島在行・岩間優希(2009)は、君塚の紹介とその行為の意義を「平和博物館研究史」の文脈に位置づけ直し、その考察を深めている(『立命館平和研究』別冊)。日本国内では、制度からむしろ疎外され続けている領域で展開している出来事であるだけに、いわゆる「博物館界」一般には知られていないきらいもあるが、日本の「平和博物館」は現在、世界で最も注目されている社会教育施設の一つとして知られている(『Museums for Peace:Past, Present and Future』 The Organizing

日本国内においても、北海道から沖縄まで、市 民レベルにおいても、研究レベルにおいても、地 道なネットワークが民間の、草の根の力によって 広がってきている。若いメンバーの関心もひとき わ高い。多くの研究課題も残る。孤立を進める「博 物館学」を目指すのではなく、本研究会において も、こうしたネットワークとの接続と交流を願っ てやまないと思うのは、ひとり評者だけではない だろう。

Committee of the 6th International Conference

of Museums for Peace, 2008)

【早稲田大学大学院/社会教育・博物館研究】

練馬区立石神井公園ふるさと文化館 常設展示 内山大介

はじめに

平成22年3月25日、東京都練馬区にある石神井 公園内に新しい博物館「練馬区立石神井公園ふるさ と文化館」(以下、当館)が開館した。それまで練馬 区には、昭和45年に石神井図書館地階に設置され た郷土資料室が区立の博物館施設として存在してい たが、「狭隘であったため、収蔵資料増加への対応や 展示の充実など」の課題があった。それらの問題を 解決すべく、平成16年から整備計画に着手し、約5 年をかけて開館に到ったという(小金井2010)。

ここ数年、例えば東京都内においては目黒区・足立区・北区など、常設展示を全面あるいは一部リニューアルする博物館の事例が増えてきている。しかし当館のように建物全てを新築してオープンする例は決して多くはないし、また石神井公園という都会の観光スポットでもある場所に新規開館した当館は、一般にも、また博物館界にも今後多くの反響があるだろう。そしてそれは、単に建物や設備が新しいということにとどまらない。博物館としては、その展示内容や手法にも新しい傾向や技術が取り入れられているし、また地域の博物館としての独自性を発揮するための努力が随所にちりばめられている。そこで本稿では、近年の博物館の動きを念頭に置きながら、当館の常設展示の意義を論じてみたい。

(1)展示施設の概要

ふるさと文化館と付属施設 当施設はギャラリー や会議室などの施設貸し出しも行い、また隣接する 池淵史跡公園内に区指定文化財・内田家住宅などの



ふるさと文化館外観



わがまち練馬情報コーナー1

屋外施設がある。また石神井プールなども併設されており、多目的な利用を考えた施設設計となっている。施設運営計画にも掲げられているように、生涯学習や観光レクリェーションをはじめとする様々な利用者のニーズに応えることを目的にした施設といえ、博物館自体もそういった側面が強いと思われる。 展示施設の概要 当館の展示施設は1階と2階に分かれる。1階には「わがまち練馬情報コーナー1」というスペースが設けられ、館周辺でみられる鳥、虫、植物や名所、散歩コース、伝統工芸などを紹介して いる。来館者が掲示板に情報を書き込んだり、工作をしたりすることのできる体験コーナーとして、大人から子どもまで楽しめるスペースである。また 2 階がいわゆる常設展示、企画展示のスペースであり、さらに図書閲覧や情報検索のできる交流ライブラリーや練馬情報コーナー2 があり、全体を通して利用者が積極的に参加・体験をしたり、情報発信をすることのできる館としての性格が伝わってくる。

(2)「近郊」と「都市化」

展示のストーリー 常設展示のストーリーは、プロローグ、江戸以前の練馬、近郊農村文化、近郊の村からまちへ、近郊のまち文化、体験コーナー、エピローグの7コーナーから構成されている。基本的には原始古代から現代までを視野に入れた通史的展示であるが、その中に民俗資料などを取り入れながら強いテーマ性を持たせている。特に近代以降が展示の4分の3以上を占め、現代の我々の生活に近い時代に焦点を当てた内容である。そして、上記の展示コーナー名をみれば明らかなように、ストーリーの軸となるのが「近郊」というテーマであろう。具体的には、農村から都市部へと変貌をとげた地域の姿が描かれているのであり、練馬の近現代史における大きな生活変化をそこに見出している。

練馬大根からサラリーマンまで その近郊としての練馬を印象づける最も大きな要素が、練馬大根である。展示室入り口すぐにみえる巨大なたくあん漬けの大樽はその象徴ともいえる。江戸・東京の食を支えた食材としての大根は、江戸時代以来練馬から都市部へ出荷され、肥料としての下肥が逆に都市部から練馬へもたらされた。その循環が都市と近郊との関係性の象徴であり、それを支えた農家や農村に関わる史資料がそれを裏付ける。さらに大根のたくあん漬けの生産や、種子屋の活動により名産品として



常設展示室の様子



昭和30年代の「体験コーナー」

全国や海外にまで広がる練馬大根が紹介される。それは近郊地域から全国へ発信される練馬の姿であり、 練馬が誇る地域文化のひとつであることが伝わって くる。

また近郊としての練馬を位置づけるもうひとつのテーマが都市化による人の往来である。近代以降、鉄道路線の充実や道路の整備が進められて地域の住宅地化が促され、また行楽地としての一面ももつようになる。それは、練馬からサラリーマンとして都心へ通う人々、都心から観光客として練馬へ来る人々を表現した内容であり、ここでも都市近郊としての練馬の歴史が強く意識されているといよう。人や物資が練馬と都心とを行き来し、そこに近郊地域としての練馬の姿が形成されていったのである。これらの展示内容は、背景にあるテーマを明確に示すものであり、来館者にも非常に分かりやすい構成となっている。

都市と近郊 評者は以前にも都市と近郊という博 物館展示のテーマがもつ意義と課題を論じたことが あるが(内山2009)、同様の指摘が当館にも当ては まるものと考えられる。地域間の関係性を問う展示 は、従来の博物館展示の中で示されることはあまり なかった。それは近年みられるようになった新しい 展示の取り組みであり、また多様な関係性の中に地 域を位置づけることのできる相対的な地域観を根底 に含む点で、意義深いものである。しかし一方で、 近郊というテーマであればなおさら浮き彫りにされ る、都市から地域に負わされた様々な歴史的役割を どう表現していくのかが課題となろう。特に、都市 化による公害問題、住宅地化による新・旧住民などの 地域内の軋轢、いわゆる迷惑施設への対応など、近 郊ならではの望ましくない歴史的問題があるはずで あり、またそれは現在にもつながる地域課題である し、また成増飛行場を抱えた練馬の戦時中の役割や 歴史が展示に明示されない点も気になるところであ る。近郊というテーマからみえるはずの地域観の多 様性への追求を今後期待したい。

(3) 体験コーナーとしての昭和30年代

展示の概要 また、博物館展示として近年話題となっている昭和 30 年代の展示が当館にも作られている。昭和 30 年代を中心とした暮らしを表現した「戦後生活再現展示」が、平成 3 (1991) 年の葛飾区郷土と天文の博物館を皮切りに、17 の博物館で行われているといわれるが(青木 2007)、最近でも足立区立郷土博物館や国立歴史民俗博物館などに同様の展示がみられるようになり、全国で 20 例前後になるものと思われる。その中で、当館の特徴をあげるならば、ひとつは名称にも冠された「体験コーナー」としての位置づけである。当コーナーは「昭和 30 年代後半の駅前の風景と昭和 40 年代の民家を再現」

(石神井公園ふるさと文化館 2010) したもので、西部電車・石神井公園駅の巨大写真パネルの両側にその町並みをファサードのみ再現し、暖色系のライティングによって夕暮れの情景を演出している。 さらにその奥には民家の台所や居間などが生活用具とともに再現され、来館者は中に入って観覧することができる。加えて当コーナーはその中央にコマや輪投げなどの昔遊びができるようになっており、全体として体験・体感を前面に出したコーナーであるといえる。

昭和 30 年代展示の特徴 一般に、戦後を表す展示 として高度成長期を選択する博物館が増えているが、 その多くが原寸大の復元模型を配し、そのリアルさ を追求するためにキャプション等を最小限にとどめ るという事例が多い。そのため、来館者にとっては 一見するとそれが展示ストーリーにおいてどのよう な位置づけで示されているのかがわかりにくい場合 も多くみられる。またそれらはストーリー上の位置 づけよりも、昔の暮らしや情景を体験・体感すること に重点が置かれている場合もある。例えば福井県立 歴史博物館では通史展示としての「歴史ゾーン」と は別に、「トピックゾーン」として昭和30年代の模 型や資料を展示しており、通史上の意味とは異なっ た展示意図がそこにはみられる。このような事例は 当館における展示と同様の性格をもつものであろう。 しかし当館では、別コーナーで都市化と住宅地化を 表現しているだけに、当コーナーでも高度成長期に 発達した新しいまちとしての鉄道沿線の地域や人々 の生活を具体的に表現することができたはずである。 それだけに、細かな設定や説明がなかったのは残念 であった。

(4)展示手法と体験・体感

一次資料と二次資料 当館のようなテーマ性の強

い展示には、資料相互の関係性や流れを示す必要があり、展示パネルによる文字での説明や模型類が多用されることが多い。裏を返せば、それは一次資料それ自体の価値が薄れてしまうことでもある。しかし当館では実物資料が多く配され、また考古・民俗資料を中心に露出展示を多く取り入れることにより、資料自体のもつ意味を示す努力が垣間見える。さらに最も注意が払われているのが、ハンズオンを展示に組み込むということだろう。一次資料・二次資料を含めて、さわる、のぞく、動かすといったアクションを来館者に求める展示が各コーナーに配されており、展示設計において強く意識された要素であることが分かる。

展示替えへの配慮 また、入れ替えの容易な展示ケースや、壁面に配されたラインによってパネルや資料の高さが自在に変えられるラインシステムをみれば明らかなように、自由な展示替えを念頭に置いた作りであることが分かる。また全体として小コーナーを細かく配置した設計も今後の多様な運用を見据えているように見受けられる。常設展示は作ってしまえば終わりではなく、最近では常に新しい情報をもとに成長する展示であることが求められているが、当館でもそういった配慮が各所にみられた。常設展示に対する考え方は、このような側面にも表れているといえよう。

おわりに

以上、練馬区立石神井公園ふるさと文化館における常設展示について、特に重要な要素といえる近郊というテーマと、体験・体感的要素、さらにその展示手法について個々に論じてきた。地域博物館を語るときに、参加・体験・体感はもはやはずせない要素となった。それは当初、講座やワークショップなどの

教育普及事業として推進される側面をもっていたが、 展示そのものに体験的要素を取り入れる博物館が増 え、それらが常設のものとして広がってきている。 当館ではそれが徹底された形で示されているといえ よう。さらに参加・体験を広義で考えるならば、展示 叙述そのものにも当てはまる。当館の常設展示は特 に古くからの地域住民にとっては非常に馴染みの深 いテーマや時代設定で行われており、見る側にとっ ては自らの経験や知識を呼び起こす契機として観覧 することができる。自らの記憶と練馬の歴史とを結 びつける媒介として展示が機能するともいえるだろ う。それはいわば、来館者の意識の上での参加・体験 を促しているものである。さらに、地域の情報を来 館者自身が書き込める1階の掲示板などからは、展 示を通じた来館者からの情報収集も想定していると 考えられる。それが展示へとフィードバックされ、 展示替えによって成長する展示としていくことが、 今後の可能性でもあり課題でもあるだろう。近年の 博物館に求められる様々な課題が、当館の展示には 具体的に示されているのである。博物館における参 加・体験・体感の新しい形を今後も期待したい。

参考文献

青木俊也 2007年 「戦後生活再現展示の思考」 『武蔵大学人文学会雑誌』 39-1

内山大介 2009 年「博物館展示と地域像相対化の可能性-足立区立郷 土博物館における新常設展示の検討から-」『博物館学雑誌』 35-1、全日本博物館学会

小金井靖 2010 年「区民とともに歩む新しい地域博物館」『石神井公園 ふるさと文化館ニュース』創刊号

石神井公園ふるさと文化館 2010 年『常設展示ガイド』

練馬区 2007 年『(仮称)「ふるさと文化館」展示基本計画説明書-概要版』

練馬区 2007 年『(仮称)「ふるさと文化館」施設運営計画説明書-概要版』

【歷史民俗資料学研究科博士後期課程· 足立区立郷土博物館 専門員】

「博物館」と「博物館学」研究会のあゆみ

【発表会: 2004年10月26日~】

【発表会: 2004:	午 10 月 4	20日~】	
年月日	<u> </u>	発表者	概要(発表タイトル、参考文献等)
2004年10月26日	第1回	大宮耕一	発表タイトル:「博物館基本文献から見る博物館学小史」
2004年11月9日	第2回	大嶋千恵子	発表タイトル:「博物館マーケティング - 江戸東京博物館を事例に-」 参考文献:諸岡博熊 2003「博物館とマーケティング」『みんなの博物館 - マネジメント・ミュージ アムの時代』日本地域社会研究所)
2004年12月14日	第3回	内山大介	発表タイトル:「地域博物館について-相模原市立博物館を事例に-」 参考文献:伊藤寿朗 1990「地域博物館の思考」『歴史評論』483
2005年2月1日	第 4 回	大宮耕一 大宮耕一	発表タイトル:「『博物館学』とは何か」 発表タイトル:「群馬の博物館-榛東村耳飾り館・かみつけの里博物館」
2005年5月17日	第5回	内山大介	発表タイトル:「地域博物館における人文系展示と自然系展示ー平塚市博物館のリニューアルにみる理論と実践ー」
2005年11月22日	第6回	佐久間かおる	発表タイトル :「教育者としての学芸員-日本においてのエデュケーターの確立を目指して -」
2006年4月1日	第7回	大宮耕一	発表タイトル:「教育機関としての博物館の考察-博物館法成立以前の博物館史から」
2006年5月13日	第8回	吉村祐一	発表タイトル:「取り残された日本博物館ー資料情報化の国際基準と現場の意識」
2006年8月23日	第9回	今井功一	参考文献:吉田憲司 1998「民族誌展示の現在-表象の詩学と政治学」『民族学研究』62-4
2006年9月13日	第 10 回	竹田秀一	参考文献:福田珠己 1997「地域を展示する―地理学における地域博物館論の展開―」『人文 地理』49-5
2006年9月27日	第11回	磯貝奈津子	参考文献:青木豊 2003 「展示の概念」 『博物館展示の研究』雄山閣
2006年10月7日	第 12 回	大宮耕一	参考文献: 金子淳 1996「博物館と学校教育『連携論』の系譜とその位相」『くにたち郷土文化館 研究紀要』1
		金田晋也	発表タイトル:「大学博物館とその概念」
2006年11月15日	第 13 回	内山大介	参考文献: 君塚仁彦 1996「高度経済成長期における地域変貌と博物館運動-千葉県君津市 における事例を中心としてー」『東京学芸大学生涯教育研究紀要』1
2006年12月6日	第 14 回	吉村祐一	発表タイトル:「博物館における民俗資料情報化の問題点」
2007年4月25日	第 15 回	四方規仁	発表タイトル: 「五感に訴えかける展示について」 参考文献: 小西雅徳 1986「感覚展示論-観ることから見ることへ、そしてみることへの試み」『國 學院大學博物館学紀要』11
2007年6月1日	第 16 回	今井功一	発表タイトル:「野外博物館国立民家博物館構想」 参考文献:青木俊也 2007「生活再現展示の思考」『年報人類文化研究のための非文字資料の 体系化』4、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム、丸山泰明 2006「文化政策としての民俗博物館ー国民国家日本の形成と『国立民俗博物館』構想ー」『同上』3
2007年6月29日	第 17 回	磯貝奈津子	発表タイトル:「『博物館』におけるバリアフリー-博物館・利用者の意識をもとに一」 参考文献: 山本哲也 1996「博物館のバリアフリー計画」『國學院大學博物館学紀要』21、駒見 和夫 1997「バリアフリー博物館への指向」『博物館学雑誌』22-1
2007年7月27日	第 18 回	内山大介	発表タイトル:「博物館展示と『地域』の相対化ー博物館における人権・差別から考える一」 参考文献:吉田憲司 2007「異文化と自文化の展示をめぐる新たな動き・2007」『博物館の展示 表象-差別・異文化・地域』大阪人権博物館、福田珠己 2007「『地域』と博物館」『同上』
2007年9月14日	第 19 回	竹田秀一	発表タイトル:「博物館における市民参加の意義」
2007年10月26日	第 20 回	金田晋也	発表タイトル:「『通俗教育館』設置と東京教育博物館における教育活動の変化」 参考文献: 椎名仙卓 1976「博物館発達史上における『通俗教育館』」の位置」『博物館学雑誌』 1-2、椎名仙卓 2003「博物館の子どもに関わる教育活動の展開 - 東京教育博物館を中心として」『子どもと教育 - 川並弘昭先生古希記念論集』
2007年11月30日	第 21 回	大槻 茜 松本美虹	発表タイトル:「展示批評ー神奈川大学 21 世紀 COE プログラム実験展示『あるくー身体の記憶ー』」
2008年1月18日	第 22 回	千葉菜穂子	発表タイトル: 「エコミュージアムについて」
2008年5月16日	第 23 回	竹田秀一	発表タイトル:「鶴田総一郎と鶴田文庫」
2008年6月13日	第 24 回	今井功一 内山大介	発表タイトル:「戸田市内の小学校による郷土博物館利用授業」 発表タイトル:「博物館展示と『地域』の相対化(その2) - 足立区立郷土博物館と常設展示リニューアル構想の紹介 - 」
2008年7月4日	第 25 回	四方規仁	発表タイトル: 「広瀬鎮『博物館社会教育論』の生涯学習概念について」 参考文献: 広瀬鎮 1992「博物館と社会教育 』『博物館社会教育論』学文社
2008年7月25日	第 26 回	大槻 茜	発表タイトル:「博物館のマーケティングー顧客志向を中心に一」
2008年9月19日	第 27 回	竹田秀一	発表タイトル:「社会教育観と博物館」
2008年10月29日	第 28 回	金田晋也	発表タイトル:「博物館と産業の関わりについて-企業の博物館を考えるために-」
2009年10月30日	第 29 回	今井功一	発表タイトル: 「「図書館・郷土博物館 25 年大百科」展から考える」
2009年11月27日	第 30 回	金田晋也	発表タイトル: 「地方史研究協議会シンポジウムから見える今後の博物館を取り巻く環境ー報告事例からの考察ー」
2009年12月18日	第 31 回	四方規仁	発表タイトル:「これからの博物館の運営に関する一考察」
2010年2月11日	第 32 回	機貝奈津子	発表タイトル: 「大学博物館についてー神奈川大学における一試論ー」
2010年5月5日 2010年7月30日	第 33 回第 34 回	竹田秀一	発表タイトル :「見学会をとおして一博物館展示について思うことー」 発表タイトル :「旧石器ハテナ館の整備・運営について一学習館としての役割ー」
2010 牛 / 月 30 日	おいり	佐原 慧	元玖ノコ「ル・川口命/ ソノ 堀り窪浦・埋呂に フバ・(一子百貼としてり役割一]

【見学会: 2004年11月23日~】

年月日	回	見学館
2004年11月23日	第1回	台東区立下町風俗資料館 上野の森美術館
2004年12月21日	第2回	横浜市歴史博物館
2005年1月5日	第3回	相模原市立博物館
2005年4月1日	第4回	横浜マリタイムミュージアム 日本郵船歴史博物館 横浜開港資料館 横浜都市発展記念館 横浜ユーラシア文化館
2005年7月29日	第 5 回	東京海洋大学海洋科学部附属 水産資料館 物流博物館 味の素 食とくらしの小さな博物館
2006年7月29日	第6回	紙の博物館 北区飛鳥山博物館
2006年11月3日	第7回	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館 國學院大學 神道資料館 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館
2007年5月27日	第8回	国立科学博物館
2007年9月30日	第9回	川崎市立日本民家園 東京農業大学 「食と農」の博物館
2007年11月11日	第 10 回	株式会社虎屋 菓子資料室 虎屋文庫 衆議院事務局 憲政記念館
2008年8月24日	第 11 回	葛飾区郷土と天文の博物館 足立区立郷土博物館
2008年11月16日	第 12 回	文京ふるさと歴史館 目黒区美術館
2009年11月3日	第 13 回	東京国立博物館 三菱一号館美術館
2009年12月20日	第 14 回	川崎市平和館 あーすぷらざ (神奈川県立地球市民かながわプラザ)
2010年1月31日	第 15 回	江戸東京たてもの園
2010年2月11日	第 16 回	明治大学博物館
2010年6月6日	第 17 回	国立ハンセン病資料館 練馬区立石神井公園ふるさと文化館

「博物館」と「博物館学」研究会だより 第10号

編集・発行:「博物館」と「博物館学」研究会(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科内)

発 行 日: 2010年10月20日 e-mail: hakubutukan@hotmail.co.jp